

# 非実在 ~Airmys~ 探偵小説研究会

エアミステリ

二十拾  
號



エアミステリ研究会

# 非実在探偵小説研究会20号 目次

## 企画

企画1 お題競作 「大量殺人／連続殺人」

追悼の島

麻里邑主人

..... 6

メタモルフオーゼの密室死体

佐倉丸春

..... 56

## 第四条

岡村美樹男

..... 65

企画2 アガサ・クリスティデビュー100周年＆生誕130周年記念

クリスティオマーゾユ短篇企画

そして誰かいなくなるはずだった

麻里邑主人

..... 192

クイン氏の交霊会

佐倉丸春

..... 199

A〇〇殺人事件

三田村恵梨子

..... 207

## その他

ライトノベル本格ミステリ補完計画

麻里邑主人

..... 92

〈評論〉相剋する世界観と隠喩の物語——『インテリぶる推理少女とハメたいせんせい』論

たねいり

..... 139

表紙・扉ページ

ウスダアヤ



## 企画1 お題競作

# 「大量殺人／連続殺人」



今回のお題競作企画は、テーマ「大量殺人／連続殺人」です。

ミステリではお馴染みの大量殺人や連続殺人というワードですが、今回はこの二つのうちどちらかのテーマを採用してればOKとしています（一度に大量殺人を行うのでも、大人数じゃないけれど連続殺人ならばOK、といった具合）。

このテーマ競作には3名が参加しました。各自の持ち味を活かした読み応えたっぷりの「大量殺人／連続殺人」の作品が揃いました。

それではどうぞお楽しみ下さい。

# 第四條

おかむらみきお  
岡村美樹男

作中のロボット工学三原則は、アイザック・アシモフ『われはロボット』（早川書房・小尾美佐訳）より引用しました。

1

【ナリハマナシヨナルユニバーシティ・カムワラ教授最終講演より】

「歴史小説家の塩野七生さんは傑作『ローマ人の物語』の中で『天才とは、その人だけに見える新事実を、見ることでできる人ではない。誰もが見ていながらも重要性に気づかなかつた旧事実、気づく人のことである』と

語っていますが、ロボット工学ロボットイクスはまさにこの旧事実の再発見によって発展してきた学問です。

産業用ロボットアームの位置制御の移動体への展開。ゼロモーメントポイント理論に基づく動歩行の再発見。ディープラーニングの発達によって復活した行動学習研究……例を上げればきりがありませんが、今世紀最大の再発見が『ロボット工学三原則』であることは間違いないでしょう。こちらをご覧ください——」

## 第一条

ロボットは人間に危害を加えてはならない。  
また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

## 第二条

ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。  
ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。

### 第三条

ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

### 第四条

ロボットは、実時間において可能な範囲で、前三条を遵守しなければならない。

「ロボット工学三原則はSFファンだけでなくロボティクス研究者の間でもよく知られていましたが、実際に三原則に基づくロボットの知性化研究が本格的に始まったのは21世紀に入ってからのことです。実時間において有限の情報処理能力しか持たないロボットに三原則を組み込むというのは、夢見がちなロボティクス研究者にとつてさえも、長らく絵空事であったのです。

今なお『三原則完全』は達成されていませんが、デイブラーニングや量子コンピュータといったテクノロジの発達をバックボーンに、ロボット工学三原則の研究は進みました。とりわけ、ロボット工学三原則にひとつの原則を加えた『実時間ロボット制御四原則』が誕生してからの展開はめざましいものでした」

「条件付きとはいえ三原則破りを容認するこの条文は、一読して危険なものに思えるかも知れませんが、ロボットの活動環境や、活動条件、求められる応答速度等々を調整すれば、環境制御工学的にみて十分な安全性を担保できます。実用的な発明だったのです。しかしながら、夢見がちなロボティクス研究者の間では『三原則完全』の達成に対してあまりに後ろ向きなこの条文は不評でした。

……その後も多くの研究者が『三原則完全』の達成を目指して様々な挑戦を試みました。そのほとんどは失敗に終わりました。しかし、一人の天才が『三原則完全』の実現に向けて、決定的とまでは言えないまでも飛躍的な一歩となるアイデアを考案したのです。そのアイデアとは先ほどの第四条に第二項を追記するというものでした——」

#### 第四条

(1) ロボットは、実時間において可能な範囲で、前三条を遵守しなければならない。

(2) ロボットは、前三条を遵守しなければ、罪を得る。

2

ニューフロンティアを出てからの数時間はひたすら退屈だった。

オープンシティへと続く一本道を疾走するオートモビルマーズ・カクタスの左右には高さ三十メートルほどの火星サポテンスペースワイドウツが並ぶばかりで、見るべきものは何もない。S W Wも圏外だ。俺は仕方なしに耳殻イヤフォン末端に積みつばなしだった古い映画を観ることにしたのだが、これがまたひどい出来で、何度もあくびをかみ殺す羽目になった。

狙いはわかるんだよ。救国の聖女から神性を剥ぎ取り、徹頭徹尾人間として描ききることなんだろうさ。そりゃあそれでアリなのかもしれない。だが、俺が観たかったのは、イン格蘭ド軍とフランス軍のドンパチだけ

なんだ。

ぶつくさ言いながらコーヒを飲む。二杯、三杯。さすがに膀胱が限界を迎えたのでトイレに向かい、戻ってきたところでようやくのこと、オートモビルのフロントパネルがオープンシティの街並みを捉えた。

——二十一世紀中頃に始まった人類の火星移住は、数十年の時を経て、着実な成果を上げつつあった。既にして火星上には最初の都市ニューフロンティアのほか九個のドーム都市が建設済みであり、総人口も昨年ついに十万人を超えたところだ。

テラフォーミング計画も順調で、火星地球化機構の発表では、理論上ドーム無しで人類が生存できる環境は今年度末には5000平方キロメートルを超えるということだった。火星初の非ドーム型都市・オープンシティの建造も、当初から計画されていた分については99%が完了しており、現在は人類の移住前の環境グローバルラメータ評価試験も最終段階に入っている。

「……本当に地球の街みたく作ってあるんだな」

オートモビルは既にオープンシティの中央を貫くハイウェイの上まで来ている。目に見える範囲に火星サポテンはなく、代わりにコンクリート・ビルの密林が遠く

まで広がっている。技術的にも環境的にも制約の多かった他のドーム都市ではありえない光景だった。

すぐにでも街を歩いてみたいという思いに駆られるがそうもいかない。理論上人類の生存に適した環境が維持されているとは言っても、ここは火星だ。地球とは大気の成分が全く異なる。体を慣らす時間が必要だった。

「お待ちしていました、プロフェッサー」

環境適応センターのビルに入り、二重扉の奥にオートモービルを停めると、一体の人間型ロボット——ヒューマノイドが話しかけてきた。

「火星産業総合研究所自立機械研究部主任研究員のヨウ・サノアだ。教鞭を執つたことはないから、プロフェッサーは勘弁してくれ」

「かしこまりました」

綺麗な発音だった。それにお辞儀をする動作もかなりスムーズだ。実労働用のヒューマノイドらしく、一目で機械とわかる造形だが、それだけに妙に人間的に感じられる所作だった。

「ではサノアさま、わたしはシモン。今回の調査で貴方のナビゲーションを務めさせていただきますのでよろしくお願ひします」

口調が少し固い。もう少しフランクな方が好みだが、別にヒューマノイドとお友達になりにきたわけではない。「まずはメディカルルームで環境適応だな。資料は読める状態になってるのか？」

「室内の端末に落としてありますが、最低六時間はお休みになることを推奨します」

「適応不十分で、酸素中毒になったらたまらないからな。努力しよう」

それから俺はシモンにルームへ案内するよう促した。「ここにいるのは君だけか？」

センターの廊下は静まりかえっていた。人はもちろん、ヒューマノイドがいる気配も全く感じられない。

「ええ。わたしだけです。ここは試験に関係ありませんからね」

そう言ってから、シモンはくすりと笑うような仕草を見せた。

「ご安心を。適応が済めばいくらでもご覧になれますよ」

続きは非実在探偵小説研究会20号本誌  
でお楽しみください。

# ライトノベル本格ミステリ 補完計画

2011年～2020年



## はじめに

ライトノベルにおけるミステリは貴重である。

のつけからこんなことを書いても大半の読者はびんとこないかもしれないが、これは紛れもない事実だ。というのも近年のライトノベルにはどういわけかミステリは売れないという風潮があるらしく、ミステリ作品の刊行そのものが極めて少ないのである。もしくは、ミステリ作品であっても内容紹介にミステリと謳わないで出版するケースも少なくない。実際、過去にミステリを大々的に売りにしたライトノベルレーベルは幾つかあったが、そのどれもが短命で終わっており、唯一長続きた富士見ミステリー文庫（2000～2009）でさえ途中でレーベルの売りを「ミステリー」から「L・O・V・E！」もとい恋愛路線に変更せ

ざるを得なかったほどである。なぜライトノベルでミステリがこうまで売れないのか、ここでの詳細な分析は控えるが、とりあえず冒頭で述べた言葉の意味は何となく分かってもらえたと思う。

その上で、あえてもう一度繰り返そう。ライトノベルにおけるミステリは貴重である。ましてや本格ミステリとなると、もはや絶滅危惧種に近いといっても過言ではないだろう。にも拘らずライトノベルを熱心に追いかけているミステリ読みはごく僅かしかおらず（というかそもそも読む人間が多いのであればこんなことにはなっていない）、たとえ優れた作品であったとしても余程のことでない限り注目されないまま埋もれてしまうのが現状だ。本稿ではそんなライトノベルにおける本格ミステリ作品にスポットを当てると共に、一つの区切りとして2011年から2020年の間に刊行された特別にお勧めしたい作品を筆者の独断で紹介



していきたいと思う。

ちなみに探偵小説研究会編「本格ミステリ・ベスト10」にもライトノベルミステリの紹介コーナー（「ライトノベル・ミステリ回遊」）があるが、あちらの趣旨はあくまでその年に刊行されたライトノベルミステリの紹介であつて、本稿のような本格ミステリとしてのお勧め紹介ではない。故に良い意味で差別化は図れているのではないかと考える次第である。

なお本稿では基本的にライトノベルレベル、もしくはライト文芸レベルのみで刊行された作品を取り上げるものとする。また作品紹介と併せて載っている本格度に関してはあくまで筆者による目安であり、作品の出来とは異なるものと考えて頂ければ幸いである。

## レベコ

赤月カケヤ「キミとは致命的なズレがある」（2011／ガガガ文庫）

【本格度】★★★

十歳の時に記憶を失った海里克也は度々見る少女の死体の幻覚に苦しめられていた。そんなある日、克也の許に舞い込んだ不幸の手紙。『この手紙の差出人を見つけてください。さもなければあなたは不幸になります』——果たして、その手紙が意味するものは？

第5回小学館ライトノベル大賞優秀賞受賞作。度重なる記憶障害に悩まされる主人公が、神出鬼没の謎の手紙をきっかけに封印されていた過去の忌まわしい事件を思い出していく本作の展開は一見するとサイコサスペンス風で、所々に意外な事実を用意して読者を翻弄しようとしているのは好感触。

しかしながら本作の最大の見所はその過去の事件の真相ではなく、それに

付随したある仕掛けであり、人によっては国内作家Kの某作を思い出すかもしれない。事件の真相自体はやや都合主義な印象が否めないものの、サイコサスペンス的展開を活かした本作の仕掛けは本格ファンなら一読の価値があるだろう。

赤月黎「魔女狩り探偵春夏秋冬セツナ」（2012／スーパードゥッシュ文庫）

【本格度】★★★★★

この学院では人がよく死ぬ。魔女予備軍が本物の魔女となり魔法の対価に人を殺す——魔女と魔女候補生が通う聖アラディア学院で被害者の顔を潰す連続殺人が発生。一度は魔女に殺され魂に奪われたクオンは彼を助けた魔女狩り探偵セツナと共に事件に挑む。

続きは、非実在探偵小説研究会20号本誌でお楽しみください。



---

## 非実在探偵小説研究会～Airmys～20号

発行日           2020年11月22日  
発行               エアミステリ研究会  
連絡先           airmysdj@gmail.com  
                    <http://www43.atwiki.jp/airmys-dj/>  
価格               1000円  
印刷所           株式会社ポプルス

### Special Thanks

編集作業をお手伝いして下さったエアミス研有志メンバー

©2020 エアミステリ研究会 作品の著作権は各著作者に帰属しています